

什器破壊業事件

海野十三

青空文庫

おんなたんでい
 女探偵の 恆鬱

「離魂の妻」事件で、検事六条子爵がさしのぼしたあやしき情念燃ゆる手を、ともかくもきつぱりとふりきつて帰京した風間光枝だったけれど、さて元の孤独に立ちかえつてみると、なんととはなく急に自分の身体が汗くさく感ぜられて、侘しかった。

「つよく生きるとは、なんとという苦しいことであろうか？」

彼女は、日頃のつよさに似ず、どういうものかあれ以来急に気が弱くなってしまった。たつたあれくらいのもので、急に気が弱くなってしまふというのも、所詮それは女に生れついたゆえであろうが、さりとは口惜しいことであると、深夜ひそかに鏡の前で、つやつやした吾れと吾が腕をぎゅつとつねつてみる光枝だった。

彼女の急性恒鬱症については、彼女の属する星野私立探偵所内でも、敏感な一同の話題にのぼらないわけはなかった。だが、余計な口を光枝に対してきこうものなら、たいへんなことになることが予て分つていたから、誰も彼も、一応知らぬ半兵衛を極めこ

んでいたことである。

ところが、或る日——星野老所長は、風間光枝を自室へ呼んで、

「君はなにかい、帆村莊六という青年探偵のことを聞いたことがないかね」

と、だしぬけの質問だった。

帆村莊六——といえば、理学士という妙な畑から出て来た人物だ。それくらいのことなら光枝も知っているが、他はあまり深く知らない。そのことをいうと、老所長は、

「あの帆村莊六という奴は、わしと同郷どうきょうでな、ちよつと或る縁故えんこでつながっている者だが、すこし変り者だ。その帆村から、若い女探偵の助じよりよく力を得たいことがあるから、

誰か融通ゆうずうしてくれといつてきたんだ。どうだ、君ひとつ、行つてくれんか」

「はあ。どんな事件でございましょうか」

「いや、どんな事件か、わしはなんにも知らん。ただはつきり言えるのは、彼奴あいつはなかなかのしつかり者で、婦人に対してもすこぶる潔癖けつぺきだから、その点は心配しないように」

老所長の言葉は、なんだか六条子爵のことを言外げんがいに含めていつているようにも響ひびいた。

とにかく風間光枝は、日毎夜毎の悒鬱ひごとよごとを払うには丁度ちやうどいい機会だと思つたので、早速さつそ老所長の命令しんめいに従つて、自分の力を借りたいという帆村莊六の事務所へでかけたのだ

つた。

帆村の探偵事務所は、丸まるの内うちにあつたが、今いま時とき流行はやらぬ煉瓦れんが建たての陰いん気きくさい建物の中なにあつた。びしよびしよに濡ぬれたような階段を二階にのぼると、そこに彼の事務所の名な札ふだが下くだげてあつた。彼女は、入口いりぐちに立たつていちよつと逡巡しゆんしゆんしたが、意を決して扉を叩いた。すると中から、

「どうぞ、おはいりください。扉しよに錠じようはかかつていませんから、あけておはいりください」と、若々しいはつきりした声が聞えた。風間光枝は、吾れにもなく、身体がひきしまるやうに感じて、扉を押した。すると、室内には、入いつたすぐのところところに大きな衝立ついたてがあつて、向むかうを遮さえぎつていた。その衝立の向むかうから、ふたたび声がかかつた。

「さあどうぞ。どうぞ、その椅子いすに掛かけて、ちよつとお待ちください。ちよつといま手が放はなせないことをやっていますから、掛かけてお待ちください」

「はあ、どうも。では失礼いたします」

風間光枝は、挨拶あいさつをかえして、入口を入いつた左の隅すみのところにある応接椅子おうげいに腰を下ろした。その傍わきに、別な部屋べつなへやへいくらしい扉があつて、閉しめていた。その扉のうえには、どこかの汽船会社のカレンダーが「九月」の面めんをこつちに見せて、下くだつていた。

光枝の腰を掛けているところからは、やはり衝立の奥が見えなかった。彼女はしばらくじつとしていた。衝立の向うで声をかけたのは帆村であろうが、彼は一体なにをしているのか、ことりとも物音をたてない。

彼女は、すこし待ちくたびれて、眠氣ねむけを催もよおした。欠伸あくびが出て来たので、あわてて手を口に持っていったとき、突然思いがけなくも、彼女が腰をかけているすぐ傍わきの扉が、カレンダーごと、ごとんと奥へ開いた。そして一人の長身の紳士が、ぬつと立ち現れた。その手には写真の印画紙いんがしらしいものを二三枚もっているが、いま水から上げたばかりと見えて水滴すがぼたぼた床のうえに落ちた。

(奥から出てきたこの人は、一体誰だろう?)と、風間光枝は心の中に訝いぶかった。

「やあ、どうも。たいへん早く来てくださってありがとうございます。星野先生は、ちかごろずっと元気ですか」

「はあ。さようでございます」

「それは結構です」といって、その長身の紳士は光枝の前の椅子に腰を下ろして、じろじろこつちを見た。まだ光枝が名乗りもしないのに、紳士の方では、彼女のことを先せん刻知こくつているといったような態度を示しているのだ。どことなく薄気味うすきみわるさが、彼女の背筋せすじ

に匍はいあがつてくる。

「失礼でございますが、貴方さまが帆村——帆村先生でいらつしやいますか」

「ははあ、僕が帆村です」と無造作むぞうさに答えて、「風間さんの背丈は、皮草履かわぞうりをはいたままで一メートル五七、すると正味しょうみは一メートル五四というところで、理想型だ」

「えっ、いつそんなことをお測りはかになりましたの」と、光枝は思わず愕おどろきの声をあげた。

科学探偵の腕

帆村探偵は、一向平気な顔で、

「これは内緒ないしょですが、貴女も探偵だからいいんですが、僕のところでは、訪問者が入口のところところに立ったとき、自動的に身長を測ることにしています。もちろん光電管フオート・セルをつかえば、わけのないことです。あの入口の上をござんなさい。一・五七と、まるでレジスターのような数字が幻灯仕掛げんとうじかけで出ているでしょうが」

「えつ、まあそんなことが……」光枝がふりかえると、なるほど入口の上の壁紙かべがみに、一・五七という数字がでている。

「こうすれば、消えます」なにをしたのか、帆村がさういうと、数字はぱつと消えた。まるで魔術を見ているような塩梅あんばいだった。なるほど帆村探偵という人は変っていると、光枝は感心した。

「貴女は内輪うちわの人だから、もう一つこれも御なぐさみにごらんに入れるかな。さあ、この写真はどうです」さういつて帆村は、手にしていた水のまだ切れない三枚の細長い写真の表をかえして、光枝の方に押しやった。

「あら、まあ！」光枝は、自分でも後あとで恥はずかしいと思つたほど、頓とんきよう狂きやうな声を出した。なぜといつて、帆村がさしだした三枚の細長い写真には、表情たつぷりな光枝の半身像はんしんぞうが五六十個も連続的にうつつているのであつた。それは正面と横とが同時にとれていたのでよく見るとなんのこと、それは今しがたこの部屋に入つて、この椅子に腰を下ろすときから始まつて、終りのところは、すこし睡ねむくなつて口をあいて欠伸あくびをするところまで、いやにはつきりととれていたのであつた。

「あら、まあ。あたくし、どうしましょう」風間光枝は、もう一度愕おどろきの声を発した。

「きよう試験的に、この写真機を取付けてみたんです。ちよつと貴女あなたを材料に使ってみましたが、なかなかうまく撮とれる。一分間に六十枚まで撮れます。一つのレンズは、正面にあつて、あの厚い辞書の中にあります。黒い紗しやのきれが前に貼つてあるから、こつちから見ても分りません。もう一つのレンズは、そのカレンダーの下の方に黒い波がありますが、そこに窓があいていて、扉の向うから撮るようになってゐる。いや案外簡単なものですよ」

そういつただけで、帆村は光枝の表情の変化などについても一言も批評らしい口をきかなかった。それだけ光枝の方では、間が悪かつた。

「先生は、お人がわるいんですのね」

「いや、どういたしました。これが商売ですからね、そうじゃありませんか」帆村は、そういつた後で、光枝の姿をじつと眺めていたが、やがて、

「ときに貴女は、なかなかいい身体をしていますね。うまそうな女というのは貴女のことだ。ちよつとこつちへいらつしやい。誰も居ないから、大丈夫です」帆村はそういつて、腰をうかすと、いきなり風間光枝の手首を握つて、ひきよせた。

「まあ、先生」光枝は、愕おどろきのあまり呼吸が停りそうになつた。ここへ来る前、星野社長はわざわざ、帆村の潔けつ癖ぺきを保証したが、その話とはちがつて、彼はとんでもない痴漢ちかんで

あつた。六条子爵の場合よりも、もつともつと露骨で下卑ている。光枝は、帆村と抗争しながら、そのとき脳裏に電光の如く閃いたものがあつた。それは、傍の衝立の向うに、なにか手の放せない仕事をしているといった男のことを思い出したのだ。あの男は、彼女がこの部屋に入ったときからあそこにいて、静かに仕事をつづけているらしい。なぜなら、彼はどこへ立った気配もないから、やはりあそこにいるにちがいないのだ。

「あつ、先生。およし遊ばせ。あの衝立の向うに仕事をしていらつしやる所員の方に対しても、恥かしいとお思ひにならないんですの」といって、帆村に握られた腕を無理やりに払つた。

「えつ、所員ですつて。そんな者はいませんよ。きようは僕一人なんです」

「でも、さつきあの衝立の向うから……」

「あつはつはつ、あの声ですか。あれは所員がいて、声を出したわけではなく、録音の発声器なんです。自動式に、訪問客に対して挨拶をする器械なんですよ。嘘だと思つたら、こつちへ来て衝立の蔭をごらんなさい」

「そんなこと、嘘ですわ」と光枝はいつたが、衝立の後を見ないではいられなかつた。帆村が後にさつたのを幸いに、素早くそこを覗いてみて、あつと愕いた。なるほど、衝立の

後には、誰もいない。小さな卓^{テーブル}子のうえに、なるほど録音の発声器らしいものが載っているだけだ。その附近には、人間の出ていく扉もなければ、人間の身体が隠れる物蔭もない。するとやっぱり帆村のいったとおりののである。

また新たなその大きな愕きと、そしていよいよこの部屋の中に、自分は帆村と二人きりなんだと思うと、俄にぞくぞくとしてくる或る危険に対する戦^{せんりつ}慄！ 光枝は、とんでもないとところへ来たものだど、胸がどきどきだ。はじめから安心しきって来ただけに、彼女はこの不意打^{ふいうち}に狼^{ろうばい}狽^{さい}するしかなかった。あの入口には、きつともう、扉をしめるとがちやんと閉る自動錠^{わめ}がかかっているのである。壁はこのとおり厚いし、第一窓というものがない。いくら喚^{わめ}いたって、もうどうにもなるまい。こうなるのも運命だ。彼女は、すっかり観念して、目を閉じた。

奇妙な任務

そのとき帆村の声が光枝の耳に入った。

「いや、どうも失礼しました。これからお願いする仕事に関して、あらかじ予め貴女のしよじよせい処女性は反撥力はんぱつりよくといったようなものを験ためしておきたかったです」帆村は、急に意外なことをいいだした。

「えっ、まあそんな……」

「でも、こいつばかりは話だけでも信用がなりません。やっぱり実験してみなくちゃね。さあ、そこへもう一度掛けてください」

光枝は、腹が立つというのか、それとも俄にわかに安心をしたというのか、妙な気持で、再び椅子に腰を下ろした。この年齢になるまで——と行って彼女はお婆さんだという意味ではない、これはそつと読者に知らすわけだが、風間光枝の本当の年齢は、とうねん当年とつてやつとまだ二十歳なのである。——とにかく、こんなに愕きの連発をやったことがなかった。彼女は、改めて帆村の顔をぐつと睨みかえした。このまま部屋を出て行ってやろうかと思つたほどだが、女探偵ともあろうものがと、どうにかこうにか自分のげきじょう激情をおし鎮め、帆村の次なる言葉を待った。

「うむ、僕は満足です。貴女なら、きつとうまくやるだろう」と、帆村はもとの冷い顔に

なつて、しきりにひとりうなずで肯いて、

「——さて、貴女に頼みたい仕事のことなんですがね。或るお屋敷で、主人公が小間使こまつかいをさがしているのです。尤ももつと、前にいた小間使の娘さんは、僕が買収して、親の病気だと申立てて辞めさせたんです。そこで後任こうにんの小間使が要るわけだが、ぜひ貴女にいつて貰もらいたいのです」いよいよ帆村は、こうまで彼女に手間どれた重大事件について語りだした。

「ねえ、ようがすか。そのお屋敷は、最近建てたばかりの洋館です。貴女は今もいったとおり小間使だが、こんど主人公の希望に従つて、貴女は洋装をしてもらわねばならない。明朗めいろうな娘になるのです。いま国策こくさくで問題になつてゐるが、これも仕事のうえのことだから、ひとつ思い切つて猛烈なパーマネントに髪を縮ちぢらせてください」

光枝は、最初はなにいつてるかと思つて聞いていたが、聞いているほどに、だんだん興味おぼを覚えてきた。これはなかなか念のいつた冒険劇のようである。

「そこで、向うへいつて貴女のする仕事だが、もちろん小間使なんだから、インテリくさい顔をしてはいけない。ほら、いまだき銀座通を歩けば、すぐぶつかるような時局柄じきよくがらをわきまえない安い西洋菓子のような若い女！ あの人たちの表情を見習うんですな。いや、これは女性の前で、ちと失言しつげんをしたようだ」

光枝は、またむらむらとしてきたものだから、何もいわずにいた。

「いいですか。向うへいったら、気をつけて、物を壊こわすんです。さかんに壊すんです」

「あらまあ、どうしてでしょう」向うへいったら、さかんに物を壊せ、気をつけて物を壊せといわれて、光枝はひどく愕おどろいた。どうも帆村のなすこと云うことは突飛とつびすぎて、常識ではついていけない気がする。

「コーヒー茶碗ちやわんとか、花瓶かびんとか、灰皿とか、スタンドとか、そういうものを、あれっとか、あらっとかいいながら、じゃんじゃん下に墜おとして壊してください」

「そんなことをすれば、私はすぐ鹹くびになってしまいますわ」

「なあに大丈夫。貴女なら鹹くびの心配はないから、どしどし壊してください」

「弁償べんしょうしなくていいのですか」

「弁償なんか、心配無用です。ただ心懸けておいてもらいたいのは、行ってから二三日以内に、本棚のうえにおいてある青磁色せいじいろの大花瓶おおかびんを必ず壊すこと、これはぜひやってください。そしてその翌朝、貴女は自分でハガキを入れにポストまで持って出るんです。いいですか」

「大花瓶を壊すことは分りましたが、翌朝ハガキを投函とうかんにいくと行って、なんのハガキ

をもつて出るのですか」

「誰あてのでもいいですよ。——それから大事なことは、けっして女探偵だと悟さとられないように振舞ふるまつてください。ものを壊すにしても、良心にとがめるといったような菩提心ぼだいしんを出さないで、こんな壊れ物を扱あわせるから壊れるんじゃないの……ぐらいの太々ふてぶてしきでやってください。なにしろすこしにぶい小間使らしく振舞ふるまってください」と、帆村は自分の脳のうてん天てんに指をたてた。

「まあ、たいへん骨が折れますのねえ」

「まあ、そういわないで、やってください。主人公が何をいっても何をしても、例のすこしにぶい小間使の要領でいくんですよ」

「そんなことをして、どうしようというんですの。一体どんな事件なんですか。あたしにすこしぐらいお明あかしになったっていいでしょう」

「ううん、それがいけない」と帆村は大きく頭をふり、

「そのように貴女が探偵気どりでいちやいかんです。あとのことは僕がうまくやるから、貴女はなにも愕おどろかないで筋書どおりやってください。どこまでも、うぶな娘さんのつもりでいてください」

「そして低脳ぶりを發揮はつきしろとおつしやるんでしよう」そういつて風間光枝は、横眼をつかつて、さも憎にくらしげに帆村をじろりと見た。

破壊はかい作業ぎやう

その日の夕方、風間光枝はすっかり仕度をととのえ、口入屋くちいれやの番頭に化けた帆村に伴われて、問題のお屋敷の裏門をくぐった。

裏門から裏玄関へ。裏玄関といつても、なかなか堂々たるもので、家賃百円を出してもこれくらいたいの玄関はついてまいと思われる大した構かまえだ。

「ああ大木屋か。たいへん遅おそいもんだから、もう他へ頼んじまった。用はないから、帰れ」この家の主人公にちがいない五十を二つ三つも越えた肥満漢ひまんかんが、白い麻のゆかたを着て、裏玄関までのこのこ出て来た。よほど暑がり屋と見える。

「へえ、どうも相済あひすみませんでございました。じつはこちらさまにきつとお気に入ること

大うけあいという上玉じょうだまがありましたもんで、それを迎えに行っておりましたような次第だいで——ところがこれが埼玉さいたまの在ざいでございまして、たいへん手間どれました。ここに控ひかえておりますのが、その一件でございまして、在には珍らしい近代的感觉をもちました娘でげして……」

「こら、大木屋。こんどだけは特に大目に見てやるが、この次から容赦ようしやせんぞ。この次は絶対出入差止めでいりさしとだ。特にこんどだけは——おい、なにをぐずぐずしとる。早くその——ええソノ阿魔あまつ児こを上へあげろちゆうに」

旦那様は、たいへんな騒ぎ方であった。

帆村は、わざとなんにもこの旦那様について説明をしなかつたが、玄関の段でもつて、この旦那様のこれまでの半生はんせいがはつきり分つたような気がした。なにかぼろい大仕事をして成上つた人物で、教育なんぞはないくせに、尖端せんたんでき的文化の乱食者らんじきしやであることが、絵に描いてあるように、光枝にははつきり見えるのだった。

そこで光枝は、早速さつそくその夜から、旦那様づきの小間使として、まめまめしく仕つかえることとなつた。

「ふふふん」ときおり光枝のうしろで、そういう咳せきばらいとも呻うなり声ともつかないものが

聞えた。そのようなとき、光枝がふりかえつてみると、必ずそこに旦那様のきらきらした眼があつて、とたんに旦那様は犬にとびこまれた鶏とりのようにばたばたと狼狽ろうばいなされるのであつた。

旦那様は、非常に無口の方であつた。但しこれはあたらしい小間使の光枝に対してだけの話で、その他のお手伝いさんや使用人は、方言まじりの言葉で、こつぴどく叱しかりつけられていた。

その夜のうちに、光枝は廊下のうえにコーヒー茶碗をおとして、がちやんと割つた。それが開業式かいぎようしきだつた。早速その夜のうちにこの仕事を始めておかなければ、その次の日になつてやりだすには、ちとやりにくいだろうと思ひ、ともかくも一発だけはその夜のうちにやつておくことに決心したからであつた。

がちやんと、たいへんな音がして、コーヒー茶碗の皿がたくさんの小片こぎれに分れて、あたりに飛びちつた。茶碗の方は、小憎こにくらしくも、把手とつてが折れたばかりだつた。

「な、な、なにをしておつた？」と、居間から旦那様の叫喚きようかん！ つづいて廊下をずしんずしんと旦那様の巨軀きよくがこつちへ転がつてくる気配がした。反対の方からは、雇やとい人の一隊が、それというので駆けつける。これは茶碗が破われた音に愕おどろいたというよりも、

旦那様の怒声どせいに対応して駆けつけたのであった。

「うううう、なんだギンヤがやったのか」

ギンヤ——というのは、銀やと書くべきか銀弥ぎんやと書くべきか、よくわからないが、ともかくもこれがこの邸やしきにおける風間光枝の源氏名であった。——旦那様は、唖鳴どなりつけるつもりだったらしいが、新任の楚々そそたるモダン小間使のやったことと分ると、くるしうにえへんえへんと咳せきばらいをして、早々そうそう奥へひきあげていった。その代り、他の雇人隊が、口を揃えて光枝の不始末ふしまつを叱りつけ、があがあぶつぶつはいつ果つはとも見えなかった。するとまた、奥の方からずしんずしんどんどんと、旦那様の豪快なる蹙音あしおとが近づき、「こりや、いつまでも騒々しいじやないか。壊れたものはしょうがない。早く片づけて、しずかにしろ。このバルシャガルどもめ！」なにがバルシャガルどもめか、なにしろこの旦那様のいう言葉の中には、時として訳の分らない言葉がとびだす。

とにかく、ギンヤこと風間光枝の什器破壊業じゆうきはかいぎようの店開きは、こうして行われた。

そのとき光枝が感じたことは、物を壊すことは、案外気持のいいことである。もちろん物資愛護ぶつしあいごの叫ばれる現下げんかの国策に背馳はいちする行為ではあったが、しかし光枝の場合は、壊すための理由があった。つまりそれは、帆村探偵から頼まれて、なにかの事件解決のためや

つていることゆえ、国策に背馳するものだとはいえない安心があつた。すなわち、がちや
 ーんの音を聞く瞬間、光枝の胸の中に鬱積うっせきした不満感といったようなものが、一時的で
 はあつたが、たちまち雲散霧消うんさんむしょうしてしまふのを感じたことであつた。

だが、なにゆえに、什器破壊作業をやらなければならぬか、その理由の本体ほんたいにつ
 ては光枝は何にも知らなかつたし、なんにも思い当ることがなかつた。

犠牲ぎせいの 大花瓶おおかびん

小間使ギンヤの什器破壊じゆうきはかいさぎよう作業は、その第二日にいたつて、俄然がぜん猖獗しょうけつを極きわめた。
 まず起きぬけに、電灯の笠をがちやーんとやったのを手始めに、勝手元ではうがいのコッ
 プを割り、それから旦那様の部屋にいつて灰皿を卓子テーブルのうえから取り落し（たことにし
 て実は指先でちよいついたのだつた）、たちまち旦那様をベッドの上から下へ顛落てんらくさ
 せたのだつた。

「わーあ、な、な、なにごとじや」

「どうもすみませんでございます」

「おお、ギンヤか。なに、灰皿を壊した。朝っぱら大きな音をたてちや困るね。わしはこの節、心臓がすこし弱つとるんで、物を壊してもなるべくしずかにやってくれ」そういつて、旦那様はまたベッドにもぐりこんでしまった。光枝を見ると、旦那様は、壁の方に向き伏して、その大きな肉塊にくかいが、早いピツチでうごめいているのを認めた。

「あんた、なんか業ごうびよう病びょうがあるんじゃない。だって指先に一向力がいらないじゃないの」責任者のお紋もんというのに、光枝はたつぷり皮肉ひにくをいわれた。

「病気なんてありませんけれど、あたし、そそつかしいのですわ。これから気をつけます」
 「そそつかしいのも、病気の一つだよ。子供じやあるまいし、十六七にもなつて——ちよ
 いとお前さん、年齢としはいくつだっけね、わたしや洋装の女の子の年齢がさっぱり分らな
 くてね」

「あら、いやですわ。あたし、もつと上ですわ」

「じゃあ十八てえとこ？」

「ほほほほ、ほんとはもう一つ上の十九ですけれど」と、光枝は嘘をついた。

「へえー、お前さん、十九かい。まああきれたわね。わたしや十六七とばかり思っていたよ。じゃあもう色気いろけもたつぷりあつて——旦那様もなかなか作戦がしつかりしていらつしやるわね。へえ、そうかい、十九とは……」お紋は、ひとりで感心していた。

「あのう、うちの旦那様の御商売は、なんでいらつしやいますの」

「ああら、あんたそれを知らないで来たの」

「ええ」

「ずいぶん呑気のんきな娘ね。知らなきや、いつてきかせるが、うちの旦那様はやまを持つていらつしやるのよ」

「え、やま？ 鉾山こうざんのことですの」

「そうそうその鉾山よ。金銀銅鉄鉛なまり石炭、なんでも出るんですつて。これは内緒ないしょだけだどね、うちの旦那様は、お若いときダイナマイトと鶴嘴つるはしとをもって、日本中の山という山を、あつちへいつたりこつちへきたり、真黒になつて働いておいでなすつたんですとき。つまり、鉾夫をなすつていらつしやつたのよ。そんなこと、わたしが話したといつちやいやーよ。わたしやお前さんが好きだからおしえてあげたんだがね」お紋は、ふふふと鼻のうえに皺しわをよせて気味のわるい笑い方をした。

(鉾山成なりきん金だつたのか?) 帆村探偵ときたら、仕事を自分に頼んでおきながら、これから働かせる家の主人公がなにを商売にしているかも教えなかつたんだ。お紋がこれだけ喋しゃべれば、もういい。帆村探偵なんか、間抜けの標本みたいなもんだと、光枝はひそかに鼻を高くしたことだつた。

だが一体、鉾山業のこの家の主人公と、そして帆村が苦心しつつある探偵事件と、どういふ事柄によつて繋つながつているのであろうか。それについて光枝はすこしの手懸りも持ち合わせていなかったが、彼女も女探偵のことであるから、この興味ある事実をそのうちにきつと探し当ててみせるぞと、心の中で宣言したことだつた。

こうなれば、早い方がよかろうと思つて、光枝は帆村から頼まれた大花瓶を、その日の午後、見事にがちやんと壊してしまった。なにしろ旦那様の居間は、床が煉瓦で敷いてあつたから、下におとせば必ず失敗の虞おそれなく完全に壊れてしまうのだった。もつともその煉瓦のうえには、立派な絨じゅうたん緞じゆたんが敷いてあつたが、それは小さくて、本棚の下は煉瓦れんがだけがむき出しになつていた。

「あれえ——」光枝は、大花瓶を手から離すときに、もつともらしい声をかけておいた。それから手を離したのであるが、なにしろ大きな花瓶のことであつたから、かなり派手な

音がして破片はあたりに飛び散り、その一つが彼女の脚に当たった。とたんにびりびりと灼きつくような痛味である。

「あつ、怪我をした！」チヨコレート色の絹の靴下は、見るも無慙に斜に斬れ、その下からあらわに出た白い脛から、すーつと鮮血が流れだした。

(あ、困った) そのとき、厠の扉が、はげしく鳴りひびき、中から旦那様が、茹蛸のような頭をふりたてて出てきた。

「なんじゃ、なんじゃ。やつ、またギンヤか。なにを壊した。えつ、その棚のうえにあつた大花瓶か。うーむ、それは……」とたんに旦那様の顔から血がさつと引いた。

「ううむ。——」と、旦那様は急にそわそわして、壊れた花瓶には目もくれず室内をぐるつと見まわした——が、そこで胸を拳でとんと叩きながら、

「ああ、おどろいた」と呻くようにいった。

そこへ責任者のお紋をはじめ、お手伝いさんの一隊がばらばらと駆けつけた。

「あらまあ、またオギンさんが壊したの。きようはこれで七つ目よ」

光枝は光枝で、傷口をおさえて、その場に坐りこみ、

「あいたたた」と叫ぶ。旦那様は、光枝の負傷にやつと気がついた。

「おう、えらい怪我をやったな。そりや早く手当をせんといかん。ほら、この葭たばしをもんで傷口につける。このハンカチでおさえて、そして医者を呼べ」

「あらまあ、オギンさん、怪我をしたの。天罰てんばつてきめん覲めい面よ」

「こら、なにをいっとるか。早くハンカチで結ゆわえてやれ、それからこの壊れ物を早く片づけて——」と、旦那様はいったが、どうしたわけか急にまた周章あわでて、

「おい、皆、早く向うへいけ。片づけるのはあとでいいから、早く向うへいけ」

「はい、はい」といいながら、お紋は光枝の怪我けがした脚にハンカチを結びつけようとしているのを見て、旦那様はさらに大きな声で、

「こら、ここで結えなくともいい。ギンヤを早く向うへ担かついでいけ。こら、早くせんか」

旦那様が目に入れても痛くない笥はずのギンヤまで、矢庭やにわに退場を命ぜられるとは、このとき旦那様の胸に往来するよほどの不安があったものらしい。その不安とは？

中間報告

光枝は、かねて帆村との約束で、大花瓶破壊事件の騒ぎが一通りかたづけくと、その足でハガキを出しに屋敷を出た。彼女がポストに近づいたとき、ポストの向うから、

「やあ、だいぶん涼しくなりましたねえ」と声をかけたものがある。もちろんそれは帆村莊六だった。光枝は、どぎまぎして、

「あら、まあ先生」と叫んだ。

「さあ早いところ伺いましょう。もう大花瓶を壊したんですか」

「あら、早すぎたかしら」

「そんなことはありません。大いに結構です。ところで貴女は探偵だから分るでしょうが、あの大花瓶を壊されてから主人公は、なにか室内の什器じゅうぎの配置をかえたということはありませんか」

「あーら、先生は都合のいいときばかり、あたくしを探偵扱いなさるのですね。そんな勝手なことつてありませんわ」と、やりかえしたが、心の中ではいよいよ事件の核心にふれてきたんだわと光枝はひそかに胸をどきどきさせた。

「そんなことはどうでもいい。あとで皆一つに固め貴女の抗議をうけることにしましょう。」

——で、いまの返事は、どうなんですか。まさか貴女は、それについてなんにも気がつかないというわけではありませんまい」帆村は、日頃の彼にも似合わず、妙に焦りあせ気味になっていた。

「そうですわねえ」と光枝はわざと間のびのした返事をして、帆村がじれるのを楽しみながら、「旦那様のお居間の什器じゆうきで、位置の変ったものといえよ——」

「なんです、その位置の変ったものは？」

「木彫きぼりの日光にっこうの陽明門やうめいもんの額がくが、心持ち曲っていただけです」

「ふむ、やっぱりそうか。その外に変ったものがもう一つあるでしょう」

「いいえ、他にはなんにもありませんわ」

「いや、そんなことはない。きつと有る筈ですよ。それとも貴女の鈍いにぶ探偵眼たんていがんには映らないのかもしれない」

「まあ、——」と光枝は、むかむかとしたが、

「なんともおつしやい。ですけれど、他にはなんにも変ったものはありませんのよ」

「そんな筈はないんだ。そこが一番大切なところなんだが——ちえつ、仕方がない」と帆村は無念そうに唇を噛んで、「とにかく壊れた什器は、至急補充します。それから大花瓶

は、ちゃんと元のところに置くようにしてくださいね」

「だって大花瓶は、きよう壊してしまつたんじゃないやありませんか」

「だから、至急あとの品を補充するといつてゐるじゃないやありませんか」

「ああ、また新しい花瓶がくるのですか」

「貴女も案外噂ほどじゃないなあ」

光枝は、それが聞えないふりをして、

「そして先生が持つていらつしやるの」

「そんなことは、貴女が心配しなくてもいいです」

「先生、それから……」

「頼んだことだけはやってください。もつと気をつけてゐるんですよ。失敬」帆村は、はなはだ不機嫌で、ろくに光枝の言葉を聞こうともせず、向うへいつてしまつた。

光枝は、妙にさびしい気持をいだいて、お屋敷へかへつた。そのさびしい気持は、やがて一種の劣等感と變つた。

（果して自分は、帆村のいつたように探偵眼が鈍くて、当然旦那様の居間に起つてゐるはずの什器の位置變化に気がつかないのだろうか）

光枝は、旦那様の居間へは行っていった。旦那様は、そこにいらつしやらなかつた。どこにいかれたのであろうか。来客らいきやくかも知れない。機会は今だと思つた彼女は、あたりを見まわして、誰もいないことを確かめると、つと木彫の日光陽明門の額の前に近よつた。そもそも、この額一枚が、あの大花瓶の破壊以後に位置の変化をやつた唯一の品物なのである。この額に、なにか重大なる意味がひそんでいるのだ。それは一体なんであらうか。

伸びあがつて光枝が見ていると、その額はずいぶん大した彫物ほりもの細工ざいくであつた。額の奥から、一番前に出ている陽明門の廂ひさしまで、奥行おくゆきが二寸あまりもあつて、極めて繊細な彫がなされてあつた。これはよくある一枚彫なのであろうが、このように精巧せいこう緻密ちみつなものにはじめてお目にかかつた。

だが、彫を感心しているばかりでは仕方がない。なにかこの額に関して秘密があるのである。それはなんの秘密であらうか。

「ああ、もしかすると……」そのとき光枝の頭に閃ひらめいたのは、この部厚ぶあつい一枚彫の陽明門が、じつは一枚彫ではなくて、陽明門のあたりだけが、ぽっくり嵌はめこみになっているのではあるまいか。そしてそれを外すと、この額が実は一つの箱になっている。つまり秘密の隠し箱である。

「きつと、そうかもしれないわ」光枝はそれをたしかめるために、つと手を額の方に伸ばした。そのとたんであった。彼女の背後にえへんと大きな咳払いが聞えた。
 (失敗しまった！) と思つたが、もう遅い。あの咳払いは、旦那様だ。

意外なる 収しゅう穫かく

「ギンヤ、そこでなにをしているのじゃ」

「はい。この額がすこし曲つて居りますので」

「なに、曲つていたか。はっはっはっ、曲つていてもいい。そのままにしておけ」

「でも、すぐでございますから」

「いや、手をふれることならん。すこしの曲りを直すつもりで、とたんに下に落されて、額がめちやめちやに壊れてしまつては大損じゃからな。わしはもういい加減かげん懲こりとるでな」

「どうもすみません」

「なあに、謝まらんでもいい、壊されるのには懲りていながら、あんたに居てもらおうというは、そこにソノ……」といつているとき、廊下の向うから、呼ぶ声がしたので、光枝は毒蛇どくじやの顎あごをのがれる心地こころして、旦那様の前まへを退さがった。

それから暫しばらくして、光枝は、菊の花を一杯生けこんだ大花瓶をもって現れた。そしてそれを本棚の上うへにそつと置いた。そして電気をつけた。

旦那様は、安楽椅子に寄懸よかけつて、もう居い睡ねむりをしてござった。だがそれは狸寝入たぬきねいりらしく、ときどき瞼まぶたがぴくぴくと慄ふるえて、薄眼うすめがあく。もちろん旦那様の視線は、光枝の着物のうえから身体からだをつきさしている。

「旦那様、御入浴ごにゆうよくをどうぞ」

「いや、きようはわしは、はいらんぞ」

眠ねむっている筈はずの旦那様が、はつきり返事こたへをした。あの入浴好きの旦那様が、いつになくはいらないとおっしゃる。

光枝は、ははあと思った。

(ああそうだったのか。帆村先生が、もう一ヶ所、位置ちの変かったものがある筈はずだとおっしゃったのは、この意味いみだったか)

——というのは、外でもない。たしかに、或る一つの重要物件が、あの陽明門ようめいもんの額から取出されたのだ。そしてこの居間の、他のいずれかの場所に移されたのだ。帆村はその移された場所を光枝に質問したのだ。ところが光枝は、知らないと答えたので、帆村が悲観したのであるが、まさかその重要物件が、陽明門の額から出て、旦那様の懐かいちゆう中に移されたとは、さすがの帆村も気がつかなかったのであろう。しかるに光枝は一步お先に、そのことに気がついた。

まだ帆村探偵の知らない事実を、風間女探偵は知っているのだ。彼女はちよつと得意であつた。

だが、その重要物件というのがなんであるか、光枝には分つていなかった。帆村は大体知つているのであろう。知つていればこそ光枝などをこんなところへ住込ませて、大袈裟おおげさな捜査陣そうさじんを張つてゐるのだ。

(いいわ、こつちで先生よりもお先へ、その重要物件を失敬してしまおう)。そう決心した光枝は、その夜更よふけて、朋輩ほうばいの寢息うかがを窺い、ひそかに旦那様のベッドに近づこうとした。だがそれは失敗だつた。ベッドの置かれてある主人公の居間は、錠かぎがちやんと下りていて、明あける術すべがなかつた。

その翌朝のこと、光枝は旦那様の居間へはいつていった。旦那様は、起きてたばこ蓑を喫つていた。彼女は挨拶をして、朝刊新聞をベッドのところへ持つていった。

旦那様は、きようは不機嫌と見えて、常に似ず一言もじょうだん冗談さえいわない。そして蒼い顔をして、眼が血走つていた。その間にも光枝は、この室内を一応隅から隅までぐるつと見廻すことを忘れなかつた。

(あつ、あそこだわ!) けいがん炯眼なる彼女の小さな眼に映じた一つの異変! それは高い天井の隅にある空気抜きのあみごうし網格子が、ほんのちよつと曲つていたことである。それに気がついて、だいらせき大理石の洗面器の傍にかかっているタオルを見ると、これが真黒になつてよごれていた。

(たしかにそうだわ。例の重要物件は、旦那様の懐中を出て、あの空気抜きのあみごうし網格子をあげて、てんじょうら天井裏に隠されたのにちがいない!)

光枝の胸は、またどきどきしてきた。じつに大発見である。

光枝は、じつとしていられない気持になつて、ハガキを握ると、ポストのところへいつてみた。まさかこの早朝から、そこに帆村が来ているとは思わなかつたけれど、家にじつとしていることには耐えられなかつたのだ。

「やあ、とうとう突留めたかね」ポストのかけから、帆村がぬつと顔を出して、いきなりそういったものだから、光枝はびつくりした。

光枝の報告は、帆村を躍りあがって悦ばせた。そして二人は、連立ってお屋敷の方へ引返した。その途中、帆村が早口にいった話によると、

「もう隠す必要はないだろうが、あの大将は、じつはもう一人の仲間と協力して探しあてた或る重要資材の鋳脈のことを、内緒にしているんだ。その仲間というのは、山の中で縊死自殺の形で白骨になつてゐるのを発見されたが、遺書もなんにもない。ただその生前一枚のハガキが、その遺族の許に送られていたが、それによると、あの大将と最近大発見をしたから、やがて大金持になつて、これまでお前たちにかけて苦勞を一ぺんで取返すということが書いてあつた。だが、何を発見し、どこで発見したのか、それについては一言も触れてなかつた。そこで仕方なく、あの大将の身辺から秘密を探しだす必要が生じたのだ。何を発見し、それをどこから発見したか。これからいつて、のつびきならぬ証拠をつきつけて、あの大将の口から聞くんだ。さあ、君はさきへ帰りましたまえ。僕は表門から案内を乞うから」と、帆村ははじめて事件の内容を語つたのだつた。

光枝がお屋敷へ戻つてみると、ただならぬ様子である。なにごとが起つたのか。

「いや、お前さん。たいへんなんだよ。旦那様のお居間で、大きな音がしたんだけど、皆で入っていかうとしても、扉に錠がかかっている明かないんだよ。窓にもカーテンが下りていて、中は見えないし、困っちゃうね。それに中には旦那様がいらっしやる筈なのが、しーんとしているんだよ。気味がわるいじゃないかねえ」

お紋はぶるぶる慄えていた。でも、男たちが窓を外から破って、室内へはいった。

「おい、たいへんだ。旦那様が絆切れておいでだ」扉を内側から開けて、下男たちがいった。

旦那様は、たしかに居間の絨緞のうえに大の字にのびて死んでいた。

その傍には、小卓子や椅子などが倒れており、大きな桐の箱なども転がっている。

そのとき室内へ組立て梯子を担ぎこんできたものがあつたが、それは別人ならぬ帆村だつた。彼はするすると身軽にそのうえにのぼって、天井裏の網格子を外して、そこから小袋をとりだした。

「うむ、これだ」

小袋の口を明けて逆に見ると、黄色っぽい鼠がかった鉱石が転がり出た。

「ふん、これは水鉛鉱だ。珍らしくなかなか良質のものだ。光枝さん、大手柄だぞ」

さてここに隠されていた鉱石は現れたが、その鉱脈の所在を書いた地図も書類も、ついに見当らなかつたので、光枝はがっかりした。だが帆村は、光枝の耳にそつと口をよせて、「まだ悲観するのは早い。もう一つ、取つて置きのタネがあるんだ」

「まあ、それはほんとですの。そのタネは、なあに」

「それはあの新しい大花瓶の中にあるんだ」

「えつ」

「つまりあの大花瓶の中に、君をいつか愕かせた録音の集音器が入っているんだ。昨夜一晩、あの集音器はこの居間にいて、主人公の寝言を喰べていたんだ。僕はその寝言

の録音に期待をもっているんだよ」

「まあ、そんなことをなすつたの」

光枝の愕きはのちに帆村が大花瓶の中に仕掛けた録音線から、主人公の寝言を摘出したときに絶頂に達した。例の不正な鉱脈の秘密が知られるかと気がかりの主人公は、ついに寝言のうちに、いくたびかその鉱山の位置を喋っていたのであつた。ここに事件は解決した。

光枝は、この事件で立役者ではなかつたけれど、科学探偵帆村の活躍ぶりに刺戟され

て、元のように朗ほがらかな気分の女性に返った。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第7巻 地球要塞」三一書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

初出：「大洋」

1939（昭和14）年9月号

※底本は表題に「什器破壊業《ものをこわすのがしようばい》事件」とルビを付しています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2007年7月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

什器破壊業事件

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>